

319. 大谷コレクションの瓦（前編）

—近江の古代寺院研究の基礎資料9—

1. はじめに

大谷巖氏は八日市市^{たてべかわらやじ}建部瓦屋寺町の人である。文化財保護と歴史研究につき、長年にわたって地域の中心的な役割を果たしてこられた。そしてその主要な活動時期は、文化財保護行政が今日ほど十分に機能していなかった時代であったから、その手元には自然と考古資料等が集まることとなったらしい。

最近、八日市市教育委員会の嶋田直人氏とともに、そのコレクションの一部を調査させていただいたところ、すでに刊行物によって紹介されたいくつかの有名資料を見出すことができた。たとえば写真1に示した装飾須恵器の一部らしい蛇頭などは『八日市市史 第一巻 古代』（丸山1983）P208写真25掲載品を含んでいる。建部瓦屋寺町地先の^{みつくりやま}箕作山頂近くの、御坊遺跡として周知される巨岩付^{いわくら}近から採集されたということで、そこに^{いわくら}磐座信仰にかかわる古代祭祀遺跡の存在がうかがえる重要資料である。

しかしながら、これらが^{たてべかわらやじ}大谷氏の手元にあることはまったくと言ってよほど知られておらず、また大谷コレクションのなかには、これらと同様の取扱いを受けた古代瓦の有名資料もいくつかある。

本稿では大谷氏の格別のご配慮をもって、大谷コレクションの瓦について紹介することとした。



写真1 御坊遺跡の遺物

2. 木流廃寺の山田寺式軒瓦

^{きながせ}木流廃寺は神崎郡五個荘町木流地先に所在する。図2・写真2の軒丸瓦は『近江の古代寺院』（小笠原1989）図版166の写真2に該当する。昭和54年8月2日、大谷氏が当時大学生の黒坂秀樹氏（現在は高月町教育委員会）とともに寺院跡の中心とみられる苗村神社境内で採集した。しかしながら『近江の古代寺院』（西田1989／P86写真69）では、これが法蓮寺所蔵と誤って紹介されている。

この軒丸瓦については、これまで瓦当面の写真しか知られていないので、ここでは拓本と実測図を示して、その製作技法を中心に報告したい。まず瓦当部の成形手法については、はじめに瓦範の中房部や蓮弁部等に粘土塊を詰め込み、また外区部分には粘土紐を詰め込んだ後、それに重ね合わせるようにして粘土板を貼り付けたとみられる。瓦当厚は中房部においても最厚2.2cmと薄く、瓦当部と丸瓦部の接続は他個体を参考にすると（林1993／P51図30の1）、接着式（稲垣1970／P353）に近いと見られる。瓦当裏面には不定方向のナデと、周縁に沿ったヘラ削りとが観察される。とくに後者のヘラ削り箇所は帯状にやや高まっていることを考慮すると、それは彦根市下岡部廃寺の川原寺式軒丸瓦を初現として、湖東北部地域一帯にひろく認められる瓦当裏面下半部の堤状凸帯に該当する可能性がある（北村1995・2003）。瓦当側面には横位の強いナデが観察され、外区端に沿ってはわずかながらもバリ状粘土



図1 木流廃寺などの位置

が見られることから、瓦範は瓦当側面に被らないBタイプ（近藤1982）で、枷型の使用もなかったことがわかる。焼成はややあまく、色調は灰褐色を呈す。

図3は『近江の古代寺院』P107写真314の軒平瓦である（西田1989）。小破片であるものの、重弧紋の挽型を、瓦当面からちょうど引き抜いた箇所^{おおごおり}に該当するらしい。他個体を参考にする^{おおごおり}と（林1993/P51図30の2）、顎部の断面形状は曲線顎式とみられる。焼成はややあまく、色調は表面のみ黒色で、断面は灰白色を呈している。

木流廃寺の軒瓦は、軒丸瓦の瓦当紋様が蓮弁端の尖る重圈紋縁単弁8葉蓮華紋、軒平瓦は曲線顎式の押し挽き重弧紋である。こうした軒瓦の組み合わせは彦根市竹ヶ鼻廃寺に初現する、竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒瓦の特徴を具備している（北村2000）。そして軒丸瓦の瓦当紋様が3重圈紋縁であること、花卉を輪郭線で囲むこと、子葉が大きいこと、中房蓮子が「1+6」であること、また軒平瓦の瓦当紋様が3重弧紋であることなどから、その系列内でも古式の特徴を保持していると考えられる。加えて軒丸瓦の蓮華紋の子葉がきわだって大きいこと、軒平瓦の重弧紋の挽型の歯幅間が広くて、かつ歯が細く鋭利とみられることは、竹ヶ



写真2 木流廃寺の軒丸瓦（瓦当面）

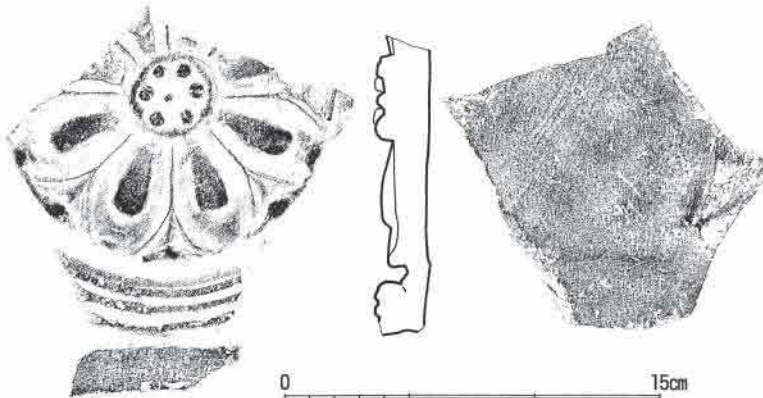


図2 木流廃寺の山田寺式軒丸瓦

鼻廃寺系列の山田寺式軒瓦のなかでも、その分布範囲の南部でみられる軒瓦の特徴を示している。すなわち同グループの軒瓦は木流廃寺のほか^{おおごおり}に五個荘町山本遺跡（五個荘町歴史博物館1999/番号158・159）で出土しており、能登川町猪子廃寺（西田1989/図版163の2）、愛知川町野々目廃寺（愛知川教委2003/P16および図版4の7）でもその可能性のある軒丸瓦が出土している。また同グループとみられる軒平瓦も、後述する八日市市カマエ遺跡でも採集されている。

木流廃寺は神崎郡衙跡とも見られる大郡遺跡に近接し、竹ヶ鼻廃寺は犬上郡衙周辺寺院跡と推定される。両遺跡は東山道に隣接することから、竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒瓦はそれによって木流廃寺にもたらされ、ついでそこを起点として周辺遺跡の瓦葺建物にも用いられるようになったとみられる。木流廃寺の創建年代については、軒丸瓦の瓦当裏面下半部に堤状凸帯が認められるとするなら、従前の年代観より下の670年代を中心に考える必要が出てくる。

3. 宮井廃寺の指圧波状重弧紋軒平瓦

宮井廃寺は蒲生郡蒲生町宮井に所在する。図4・写真3の軒平瓦には、そこでの採集を示す注記がある。凸面に縄叩きを施した後、それを回転ナデによって不完全に擦り消すこと、凹面に杵板痕が見られること、また側面の断面形状などから、粘土板桶巻き作りと見られる。顎部の断面形状は直線顎式で、瓦当下半部をやや折り曲げるように引き延ばし、瓦当面を幅広く作っている。瓦当紋様は3歯の櫛状工具による施紋と見られることから、基本的には4重弧紋と見てよいだろう。ただし挽型による3重弧紋は瓦当面の上半部については幅狭に施される一方、その下半部の幅広弧については指圧によって波状に作られている。指圧波状紋の施紋は瓦当面を上にした粘土円筒の状態^{おおごおり}で、まず瓦当面をおそらく右手の親指腹によって押圧する。ついでその指圧箇所^{おおごおり}に引かれて歪んでしまった隣接箇所を、

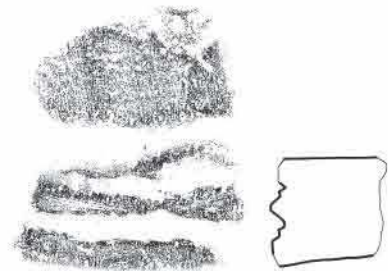


図3 木流廃寺の重弧紋軒平瓦

もとの状態に戻すかのように、右手の人差指側腹によって押さえつけている。この行為を施紋の1単位として繰り返すことによって、指圧波状紋を施したとみられる。

この軒平瓦は宮井廃寺ではI型式（蒲生町教委・滋賀大1985/P31図11の1・2、蒲生町教委1989/P115図100K16~19）に該当するから、紀寺式の軒丸瓦と組み合わせると見てよい。ただし蒲生郡竜王町雪野寺跡においては同様の軒平瓦B型式（京大1992/P29図17の5~8）が湖東式軒丸瓦と組み合わせる可能性が指摘され、宮井廃寺でも湖東式軒丸瓦が採集されている（西田1989/P89写真97）。指圧波状重弧紋軒平瓦は原則として湖東式軒丸瓦にともなって、7世紀第4四半期頃に愛知郡から伝播したとみてよいだろう。

4. 雪野寺跡の重弧紋軒平瓦と唐草紋軒平瓦

雪野寺跡は蒲生郡竜王町川守地先に所在する。図5および図6・写真4・5の軒平瓦にはそこでの採集を示す注記がある。図5は押し挽きの4重弧紋軒平瓦で、重弧紋の山部は断面逆U字状を呈し、谷部はV字状を呈す。凸面は縄叩きを施した後、それを回転ナデによりほぼ完全に消去する。凹面には縦位を中心にした丁寧なナデが認められる。焼成はおおむね堅緻で、灰色を呈す。粘土板桶巻き作りである。雪野寺跡では軒平瓦A型式に該当することから（京大1992/P29図17の1~4）、川原寺式の軒丸瓦A（京大1992/P29図16

の1・2）に組み合わせると見てよい。そしてその軒丸瓦の瓦当紋様等の特徴、および軒平瓦が曲線顎式であるといった特徴から、これは山城高麗寺廃寺系列の川原寺式軒瓦とみる研究がある（菱田1988）。

図6・写真4・5は均整唐草紋軒平瓦である。雪野寺跡では軒平瓦F型式（京大1992/P29図17の16）に該当する。瓦当面には、瓦当紋様の施紋以前に縄叩きを施している。凸面には縦位の長大な縄叩きが認められ、凹面には布痕は認められるものの、内型の桶枠板痕は認めにくい。おそらく一枚作りであろう。焼成はややあまく、色調は断面が灰色で、表面のみが灰黒色を呈す。組み合わせる軒丸瓦は判然としない。

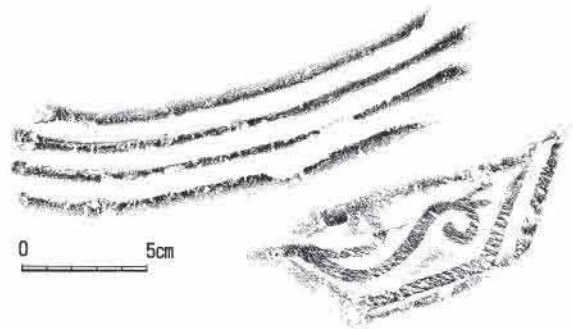


図5 雪野寺跡の

重弧紋軒平瓦

図6 雪野寺跡の

唐草紋軒平瓦



図4 宮井廃寺の指圧波状重弧紋軒平瓦



写真4 雪野寺跡の唐草紋軒平瓦（瓦当面）



写真3 宮井廃寺の指圧波状重弧紋軒平瓦（凸面）



写真5 雪野寺跡の唐草紋軒平瓦（凸面）

5. カマエ遺跡の軒瓦

カマエ遺跡は箕作山東麓の八日市市瓦屋寺町に所在する。瓦屋禅寺の参道入口東側の水田がそれである。遺跡名は小字「カマエ」に因り、その小字名は「窯前^{しくれだに}」に由来するといひ、後編で紹介する時雨谷瓦窯跡の関連遺跡とも推測される。

昭和53年、ほ場整備事業に際して多量の瓦の出土することを大谷氏が発見した。図7・写真6に示した軒丸瓦は同年10月23日に採集され、すでに西田弘氏による報告がある(西田1983・1989/P99写真218)。このほか同日には蓮華紋軒丸瓦1個が採集され、またそれとは別に軒丸瓦の3重圏紋縁片2個も採集されている。しかしこれらについては、いずれも現在は所在不明である。

軒丸瓦は中房部の破片である。複弁蓮華紋らしいが、蓮子に周環はなく、その配置も不規則である。仮にこれが川原寺式軒丸瓦とすれば、瓦当紋様の退化が著しい。焼成はややあまく、灰褐色を呈す。

図8に示した軒平瓦は曲線顎式の3重弧紋で、重弧紋の形状は上述の木流廃寺のそれに近い。軒丸瓦の重圏紋縁片2個があることを考慮すると、あるいは竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒丸瓦に伴うのかもしれない。焼成はややあまく、灰褐色を呈す。

カマエ遺跡では竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式らしい軒瓦、また退化した川原寺式の可能性もある軒丸瓦の出土がうかがわれる。これらの年代については、漠然とながら7世紀第4四半期頃の所産と見ておきたい。

2004年12月28日脱稿

(財団法人滋賀県文化財保護協会 北村圭弘)

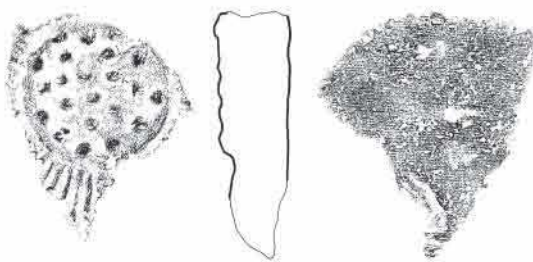


図7 カマエ遺跡の軒丸瓦(瓦当面)

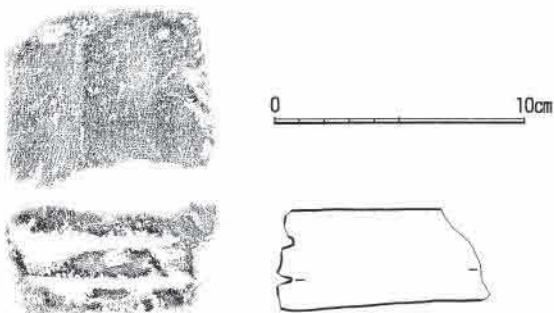


図8 カマエ遺跡の重弧紋軒平瓦

引用・参考文献

- 稲垣晋也1970「飛鳥白鳳の古瓦」『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館
- 小笠原好彦1989「木流廃寺」「軽野塔ノ塚廃寺」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
- 北村圭弘1995「湖東北部系瓦工についての覚書」『(仮称)滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』滋賀県教育委員会
- 北村圭弘2000「近江の山田寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦作りⅣ』古代瓦研究会
- 北村圭弘2003「琵琶湖東岸域の川原寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦作りⅥ』奈良文化財研究所
- 近藤喬一1982「瓦の範と瓦当紋様」『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』平凡社
- 西田弘1983「近江の古瓦Ⅳ」『文化財教室シリーズ64』(財)滋賀県文化財保護協会
- 西田弘1989「近江古代寺院の古瓦文様」「猪子廃寺」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
- 林博通1993「木流廃寺」『五個荘町史 第4巻(1) 考古・美術工芸』五個荘町役場
- 菱田哲郎1988「瓦の範と製作技術—高麗寺系軒丸瓦の検討—」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和60年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 丸山竜平1983『八日市市史 第一巻 古代』八日市市役所
- 愛知川町教育委員会2003『愛知川町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集』
- 蒲生町教育委員会・滋賀大学考古学ゼミナール 1985『宮井廃寺跡』
- 蒲生町教育委員会1989『蒲生町文化財資料集7』
- 京都大学考古学研究室1992『塑像出土古代寺院の総合的研究』
- 五個荘町歴史博物館1999『神崎地宝』



写真6 カマエ遺跡の軒丸瓦(瓦当面)